

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Hisako Yamagishi

1988年山形県米沢市で代々織物業を営む家に生まれる。短大卒業後、染織家になることを決意。現在は米沢市赤崩にある工房で、兄と共に父の教えを受けながら修業に励む。



草木染め(くさきぞめ)

天然の植物の花、葉、根などを原料に使い染め上げる技法。日本に古代から伝わる草木染めだが、米沢では江戸時代初期、米沢藩に仕えた老中直江兼統により紅花などの栽培が奨励されたことから盛んになった。

草木染織家

山岸 久子 氏

紡ぎ、染め、織る。
全てに、心を込める。

山形県米沢市。城下町として知られるこの地に、古くから伝わる草木染織がある。草木で染めたさまざまな色の糸で、反物を織り上げる、昔ながらの染織り。その魅力は、歳月とともに深みを増していく色合いだ。

山岸久子さんは、清流を包むように原野が広がる市内の山里で、技の継承にいそむ若き職人。父の幸一さんに弟子入りを決めた理由は、次のようなことだった。

きっかけは？

山岸「父から、成人式で着る振袖を染めてみないかと勧められたんです。父の助けを得ながら、終始手探りの作業でしたが、仕上がるところには物づくりの喜びを感じていました」

山岸さんの仕事は、春の畑づくりから始まる。そこで染料となる植物と、

カイコの餌の桑の葉を栽培する。そして、自ら育てたカイコの繭から糸を取るが、一反に3000個もの繭が必要という気の遠くなるような作業。

延べ400時間も掛けて糸を紡ぎ終えると、いよいよ染めだ。藍や栗の実、木の根、樹皮など数ある植物染料の中で、特にこだわっているのが鮮やかな赤と黄をもたらす紅花。師匠は、紅花の赤による染めを「寒染」と呼ぶが、それは赤の色素が熱に弱く、寒い季節にしか染められないためだ。

染めの作業は、糸を木桶に張った染料に何度もくぐらせた後、流水に浸す。水のような水を相手に素手での作業は見るからに辛そうだが、これは水中の酸素に糸をさらすことで発色を促す大切な仕上げ。しかも、染めはこれで終わらない。1年間寝かせ、来年、再来年の冬に染め重ね、より鮮やかな色合いに育ててようやく手機の作業に入ることができる。

手織りにこだわる理由は？

山岸「歪みから生まれる風合いや軽さでしようね。織るときは縦糸に横糸を均等に通すよう心掛けていますが、機を構成する木のしなり具合で、どうしても織物に歪みが出ます。それが手織り独特の味になるのです」

日頃、師匠から「物と無言で対話しながら仕事を進めれば、物から何かを訴えてくる。その瞬間を見逃すな」といわれている。全神経を張り詰めたまま、その瞬間を求めて、若き職人は黙々と糸を紡ぎ、染め、手機を動かす。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2013年4月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MORE!!
伝統の草木染織に全力で挑む彼女の姿を動画で詳しくご紹介いたします。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE



WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットで

アットホーム明日への扉



TV番組

ディスカバリーチャンネル(CS)



冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中

毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!



最新号のご案内 8月22日公開予定

No.048 / 截金師(きりがねし) 中村 華乃 氏